

「中小企業経営に効く資格」～その効用から短期合格法まで～

「語学系唯一の国家資格」全国通訳案内士（第6回）



松本光正社労士・行政書士・診断士事務所

I はじめに

10年後の日本。

スマホに流れる本日のトップニュース。

「昨年 2030 年の訪日観光客数、政府目標の 6,000 万人に到達」

街から外国人観光客が消えてしまって早や一年が過ぎようとしています。暗い話題が続く毎日ですが、ワクチンという光明も見え始めました。未来は明るいものと信じ、頑張る糧としたいものです。

ビジネスパーソンに人気で、1年以内の学習期間で合格が可能な資格をご紹介してきた本連載。最終回の今回は、外国語編の後半として全国通訳案内士を取り上げます。

全国通訳案内士とは通訳ガイドとも呼ばれ、外国人に外国語で観光ガイドを行うプロのことです。その役割から「民間の外交官」とも言われています。

語学系唯一の国家資格であることから「外国語ができる」ことの証明であり、名刺に書いてアピールすることもできます。

前回取り上げた TOEIC® では外国語を「聞く」「読む」ことについてお話ししました。今回は「話す」ことに焦点を当ててご説明します。

II 「外国語ができる」とは？

「外国語ができます」と自信を持って言えるにはどういう状態になっている必要があるのでしょうか。

ここで少し通訳者の頭の中を覗いてみます。

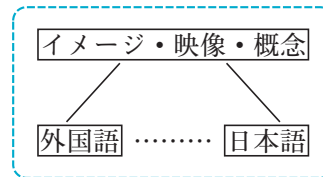
通訳というと、

外国語 …………… 日本語

このように外国語と日本語がひとつひとつ頭の中で対応していて、瞬間的に言葉を入れ替えて口

に出していると思われるかもしれません。ただ、単語レベルなら可能ですが、1分、2分の長文を訳すとなった時にそんなことができるのでしょうか。

実際はこのようになっています。



外国語の文章を聞いたら、まずそれらをイメージとして認識します。頭の中に映像を浮かべるのです。そして、その映像を日本語で表現します。

つまり、一言一句正確に訳しているわけではないともいえます。もちろん数字や人名、地名等はメモして正確に伝えますが、スピーカーが言いたい要点を伝えることが最優先です。

私たちは普段日本語で会話する際、無意識のうちに頭に浮かんだイメージを一瞬で言葉にしたり、聞いた言葉を頭の中でイメージにして理解したりしています。上の図でいうと「日本語」と「イメージ」の間を行ったり来たりしています。

外国語でも同じです。外国語で会話するという事は、無意識に「外国語」と「イメージ」の間を行ったり来たりしている状態を言います。そこに日本語は介在しません。いちいち……の部分を経由して「日本語に訳すと何だっけ…」と考えていたら時間がかかりすぎて会話になりません。

「外国語ができる」とは、訓練することによって「外国語」と「イメージ」の間をスムーズに行ったり来たりできる状態をいうのです。

「外国語ができる」とは、日本語を経由せず、外国語だけで物事を考える新しい回路が頭の中にできたことをいいます。

Ⅲ 外国語習得のための2ステップ

それでは、大人になってから「外国語ができる」ようになるためにはどうすればよいのでしょうか。

それが外国語習得のための2ステップです。ステップ1については前回お話ししましたので、今回はステップ2についてご説明します。

【外国語習得のための2ステップ】

ステップ1：短期集中で発音・基本文法・基本単語を覚える

ステップ2：とにかく聞く・話す・読む

ステップ1では、発音をマスターした後に、基本的な文法と単語を短期集中で頭に入れました。あとはとにかく実践あるのみです。

外国語習得のためには、どうしても一定量の学習が必要になります。効率的な方法はあっても楽な方法はありません。「外国語ができる」人はやはりそれなりの努力をしています。必要なのは語学のセンスではなく、努力し続ける力です。正しい方法で努力し続けられれば誰でもできるようになります。続けるためのポイントは、そこに学ぶ楽しさがあることです。

ステップ2でとにかく聞く・話す・読むには、その言語だけで生活できる環境に身を置くこと、つまり語学留学することが理想です。授業に出るだけでなく、現地の人々と積極的にコミュニケーションを取るようにしていれば、半年ほどで、日本語を介さず外国語だけで物事を考えている自分に気が付きます。この頃には寝言も外国語で言うようになっています。

企業から留学のために派遣されたり、駐在員として外国語習得に専念できる期間があったり、と

いう場合は良いのですが、通常は日本で仕事をしながら学習することになります。

そうであればできるだけ留学に近い環境を作り出して、とにかく外国語を聞く・話す・読む工夫をしなければなりません。重要なのは努力し続けることですから、自分が興味の持てる素材をたくさん用意しましょう。

インターネットで全世界がつながっている現代では、

- ・外国人とのオンライン会話
- ・SNS上での外国人との交流
- ・動画サイト
- ・海外のニュースサイト

を活用できます。

また従来からある、

- ・映画やドラマ、アニメのDVD
- ・歌
- ・漫画、小説

も、もちろん有用です。日本作品の外国語版もたくさんあります。映画等は外国語音声+外国語字幕で何度も繰り返して視聴します。

どんな場面で、どういうイメージを、外国語で何と言っているか、をセットにして記憶していきます。よく使われる重要な表現は、様々な場面で何度も出会うことになるので自然と覚えてしまいます。

次に、覚えた表現を実際に使ってみます。通じた時は嬉しくて記憶に定着しますし、間違いを指摘された時は二度と間違えまいと肝に命じるので、さらに定着しやすくなります。

これらを繰り返すことで使える文や単語を増やしていきます。

とにかく聞く・話す・読む環境を作って、楽しく努力を続けましょう。

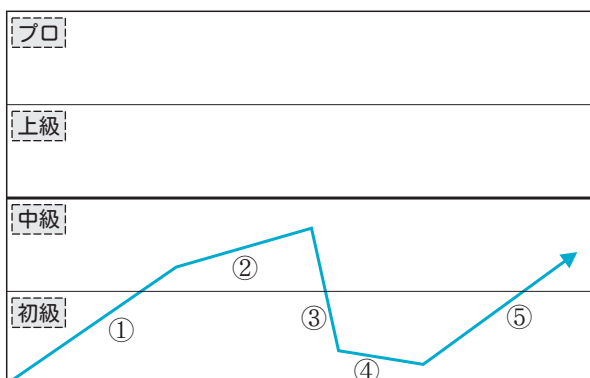
IV 中級の壁を超える

「毎日こつこつ勉強しているのに、なかなか聞き取れるようにならない。話そうとしても言葉が思うように出てこない」

「英検 2 級にはなんとか合格できたけど、準 1 級は連続して不合格。もう合格する気がしない」

「TOEIC® のスコアが 700 点を超えたあたりから伸びなくなってきた」

これらはいわゆる「中級の壁」というものです。たいていの外国語学習者がぶつかるやっかいな壁です。



- ① 初級の頃は学習内容も易しく、新しい外国語を学習することは新鮮で楽しい
- ② 中級になると内容が複雑になり、覚えることが増えてくる。これまでのような成長を実感できない
- ③ 学習が楽しくなくなってきたので中断。実力は急激に落ちてしまう
- ④ 数か月も経つと、すっかり忘れてしまっている
- ⑤ 学習を再開するも、実力の伸び方はこれまでと変わらない

このサイクルを繰り返していると何年、何十年経っても「中級の壁」を超えることができず「外

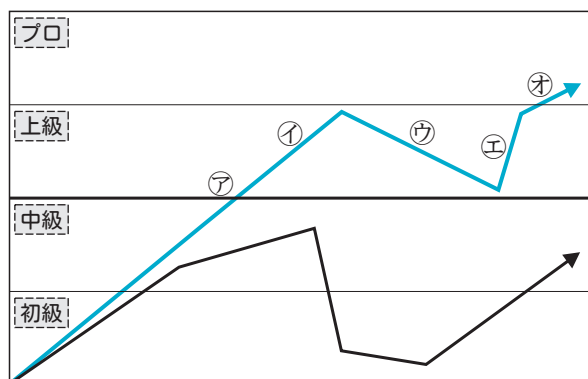
国語ができる」ようになることはありません。

このような状態になってしまう原因は 2 つ考えられます。

ひとつは、学習を始めた時のステップ 1 (短期集中で発音・基本文法・基本単語を覚える) が徹底できていなかったことです。特に発音をあいまいにしたままステップ 2 (とにかく聞く・話す・読む) に移行してしまうと正しい音が聞き取れなくなります。発音とリズムが良くないと新しい単語や文を覚えるのに時間がかかってしまいます。

もうひとつは、中級に入ると学習に新鮮味が感じられなくなり、内容も複雑になってくるため、学習量が少なくなってくることです。ステップ 2 では、外国語だけで物事を考える新しい回路を作るためにとにかく外国語の世界に浸ることが必要です。

これらを克服して、「中級の壁」を超えるとこうなります。



- ① とにかく外国語に浸ることで、外国語の新しい回路ができたことに気付く
- ② 上級になると、仕事で使う専門用語を増やしていき、ビジネスの場で実践する
- ③ 外国語学習から離れても、実力の低下速度は緩やかで中級以下まで落ちることはまずない

㊦学習を再開すれば、すぐに以前の実力を取り戻すことができる

㊧プロを目指すのであれば、専門的な教育を受ける

㊦で「中級の壁」を超えるには、外を歩いている時に目に入ってきたものを外国語で言うというのも効果的です。これを続けていくと外国語で独り言をつぶやくようになってきます。

㊧のように外国語を使う機会がなくなって学習を中断していても、急に仕事で外国語を使う必要に迫られる時があります。そういう時はこれまで使っていたメインのテキストを1冊取り出してきて、最初から最後まで音読します。すると、㊦のようにこれまで鈍っていた勘が一気に戻ってきます。

「中級の壁」を超えると超えないでは、天と地の差。ステップ2の実践あるのみです。

V 全国通訳案内士試験ってどんな試験？

- 受験資格：特になし
- 受験言語：全10言語（英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、韓国語、タイ語）
- 1次試験：マークシート方式（一部の言語は記述式）
実施日程：8月中旬
試験科目：①外国語、②日本地理、③日本歴史、④産業・経済・政治及び文化に関する一般常識、⑤通訳案内の実務
合格率：16.0%（2019年）
↓ ↓ ↓
- 2次試験：口述式
実施日程：12月中旬

実施方式：約10分間の個人面接

試験科目：①逐次通訳

試験委員が読み上げる日本語を外国語に訳した後、通訳ガイドの具体的な場面が与えられた上で、外国語での質疑応答

②プレゼンテーション

その場で提示された3つのテーマ（「大政奉還」、「リモート飲み会」、「神輿」など）から1つを選び外国語で説明した後、外国語での質疑応答

合格率：48.0%（2019年）

※筆記試験には免除制度がある

「外国語」は各言語の検定1級で免除、英語はTOEIC® L&Rの900点以上でも可

「日本地理」「日本歴史」「一般常識」も検定や大学入試センター試験等で免除あり

※前年度に合格した筆記試験科目は、翌年度のみ免除申請が可能

戦後に始まったこの試験。かつては通訳案内業試験と呼ばれていました。当初は合格率数%という大変難関な国家試験でした。そのレベルは英語でいうなら英検1級+αというイメージでした。

その後少しずつ易しくなってきた、2006年に通訳案内士試験と名前が変わった際にかなり合格しやすくなりました。現在のレベルは英検準1級+αといったところです。

かつての通訳案内業試験時代の合格者であれば、すでに簡単な通訳ができるレベルにありました。しかし現在の全国通訳案内士試験の合格は、これから通訳入門を始めてよろしい、ということの意味しています。まだ自信はないけれどもなんとか

「外国語ができます」と言えるレベルです。プロの通訳を目指すのであれば、専門学校等で通訳技術を学ぶのが一般的です。

全国通訳案内士はこれまでずっと業務独占資格でした。「報酬を得て、外国人に付き添い、外国語を用いて、旅行に関する案内をすること」は資格がないと行うことができなかったのです。

しかし2018年からは資格がなくても通訳ガイド業務を行えるようになりました。ただし資格がない者が全国通訳案内士と名乗ることはできません。つまり業務独占資格から名称独占資格に格下げになったということです。これは当時急増していたインバウンド需要に応えるためというのが理由ですが、以前から横行していた無資格ガイドを公に認めるようになったということでもあります。

それにしても資格の格下げというのはなかなかあることではありません。通常、各士業は全国連合会や都道府県単位会とは別に、政治連盟を組織して、社会的地位の向上や独占業務の維持拡大のために活動しています。しかし全国通訳案内士には全国的な組織が一切なく、いくつかの自主団体があるだけということが大きく影響したものと考えています。

では資格を取得することに意味がなくなったのかというと、もちろんそういうわけではありません。なにより国家資格があることで外国人のお客様に安心感を提供できます。有資格者同士のつながりから仕事の機会が増えたり、能力の向上に結びついたりもします。

外国語のプロとして活躍するための登竜門ともいえる試験です。以前よりは合格しやすくなっています。

VI 短期間で合格をつかみ取ろう

1次試験合格のハードルは決して低くありません。そのためどうしても筆記試験にばかり気が取られてしまいがちですが、忘れてならないのは、目標はあくまでも「外国語ができる」ようになることだということです。1次試験は「外国語習得のための2ステップ」でいうところのステップ1。2次の口述試験がステップ2にあたります。ここではできるだけ2次試験対策に力を入れたいところです。

1次試験の「外国語」については、英語であれば前回の連載でお話ししたようにTOEIC®を毎回受験して、900点を取得し免除を利用してよいでしょう。

「日本地理」や「日本歴史」は大まかな流れさえ掴んだら、観光地に関連する項目に絞って学習することで足ります。年によっては非常にマニアックな問題が多数出題されることがあります。その場合は合格基準点が通常の7割から引き下げられますので心配はいりません。

2次試験対策は、最終的には過去問を使って面接のシミュレーションを数多く行うということになります。その前の土台作りとして役に立つのが通訳になるためのトレーニング手法です。例えば、音声を聞きながら影のように後を追って発音していくシャドーイングや、1つの文を最後まで聞いて口頭で繰り返すリピーティングです。それぞれ専門のテキストを購入しても良いですし、NHKのラジオ講座を使って練習することもできます。

注力すべきは2次口述対策。通訳トレーニングの手法を取り入れて繰り返し練習しましょう。

VII 中小企業経営への「効用」

最後に「外国語ができる」証明としての全国通訳案内士資格を取得することで中小企業経営にどのような効用があるかを考えてみます。

「外国語ができる」ということは外国人とあらゆるコミュニケーションが取れるということにはなりません。お客様が外国人であるという場面はもちろんのこと、今後は自社の従業員が外国人であるという場面も増えてくるでしょう。

外国人をおもてなしするだけでなく、時には外国人を説得し、譲歩を引き出さなければならないこともあります。そのためにはその場に応じた最適な言葉や言い回しを選んで話す能力が必要になります。論理的に話した方が良い時があれば、思いを伝えるべく熱く話した方が良い時もあります。

日々のコミュニケーションを重ねていくことで信頼が生まれます。相手が説得に応じてくれるのは信頼があればこそです。

2次口述試験では、語学力だけでなく、臨機応変に対応できるコミュニケーション能力や適切なおもてなしができるホスピタリティといった人物面も評価の対象になっています。こうした能力のある従業員が渉外部門において活躍してくれることは論を待たないでしょう。

外国語を学ぶ過程では、同時にその国の文化や歴史、人々の生活や考え方についても学ぶことになります。外国語を学ぶことは、人を知ること。これこそ中小企業経営にとって最大の効用といえるのではないのでしょうか。

「外国語ができる」ようになれば、人を知り、ビジネス上の信頼を作り出すことができます。

VIII おわりに

さて、全6回にわたって「中小企業経営に効く資格」～その効用から短期合格法～をお送りして参りましたが如何でしたでしょうか。

新型コロナウイルスによって、中小企業を取り巻く経営環境は一変しました。雇用を維持しながら事業を立て直すことは容易なことではありません。

そう遠くない将来、感染は収束に向かい経済は回復することでしょう。しかしその先にあるのはこれまで想定していたものとは全く異なる環境です。

生産年齢人口の減少という大きな流れの中で、「デジタル化」「働き方改革」「生産性向上」「持続可能な社会」への動きも大幅に加速します。

新しい環境で生き残ることができるのは、環境に適応し、変化することができたものだけです。そのためにも私たちは勉強し続けなければなりません。資格取得という目標があれば、頑張り続けることができます。本連載がその一助となれば、望外の喜びです。

半年間お付き合いいただきありがとうございました。

《プロフィール》

松本 光正 1972年、奈良県磯城郡生まれ。神戸大学経営学部卒業。外国人技能実習生受入れ業務等を経て、2016年、独立開業。専門は外国人雇用。全国各地で講演、セミナーを実施している。社会保険労務士、申請取次行政書士、中小企業診断士、全国通訳案内士(中国語・英語)。近著に「待たなし！外国人雇用」～STORYで読む入管法改正～(三恵社、2019年)がある。メールアドレス：songben0103@gmail.com